

令和7年度

近畿大学附属小学校 学校評価 総括



近畿大学附属小学校

KINDAI UNIVERSITY ELEMENTARY SCHOOL

2025 年度 基本方針など

継往開来

～伝統を受け継ぎながら、新しい時代を切り拓いていく～

◆「わくわくして明日も行きたくなる園・学校」

- ・安心できる人間関係の構築：優しい友達、信頼できる先生や仲間がいる環境
- ・思いやりのある関係性の形成：あたたかく、互いを大切にする優しさがあふれる日常
- ・魅力ある学びと行事の充実：遊びや学び、行事に夢中になれる毎日
- ・基本的生活習慣の定着：当たり前を大切に 時間を守る、身だしなみ、挨拶、マナーなどの徹底

◆「自ら考え、表現し、つながる子」

- ・TPOや相手に応じた表現力、発信・交流する力の育成
- ・遊びや学びを通じて、探究的に深く考える力 ・非認知能力（共感力・誠実さ・挑戦力）の育成

◆「共に学び、共に創る」

- ・互いの実践に学び合う研修文化の充実
- ・子ども、保護者との信頼関係を築くプロフェッショナルとしての自覚
- ・子どもが自ら学びを生み出す教育実践の在り方を追究する
- ・新しいテクノロジーの活用への柔軟な対応と、従来の方法との調和
- ・ICT先進校としての積極的な情報を収集、実践、情報発信の推進

◆ 私立学校の教職員としての誇りと使命

- ・建学の精神「実学教育」と「人格の陶冶」に基づく、「人に愛され、信頼され、尊敬される人」の育成
- ・私立学校としての教育の質と付加価値を意識した実践の推進
- ・高い進路保障

◆ 園児・児童募集等

- ・少子化が進む中での園児・児童募集の安定的な確保
- ・共働き家庭の増加に対応した園・学校の役割の的確な把握
- ・「子どもが通いたくなる」「保護者が通わせたいくなる」園・学校づくりの推進
- ・柔軟な支援体制、丁寧な関係づくり、魅力ある教育活動による信頼と共感の獲得
- ・適切な募集定員の設定と園・学校の将来像の策定

Ⅰ. 学校評価について

(1) 学校評価の種類

自 己 評 価：教職員による評価ならびに、児童アンケート・保護者アンケートによる結果

学校関係者評価：附属中・高等学校校長、附属幼稚園教頭、近友会会長、保教会・同窓会会長、幼稚園同窓会会長、校長、教頭、教務部長により構成する評価委員会が、自己評価の結果について評価するとともに、改善策等についての提言・勧告を行う。（通常3月に実施）

(2) 評価基準

S：目標を上回って達成した（5.0～4.5）

A：目標どおり達成した（4.4～3.8）

B：取り組んだが達成できなかった（3.7～3.1）

C：ほとんど取り組むことができず、目標も達成できなかった（3.0以下）

(3) 自己評価について

① 教職員による評価

【教務部】		
Ⅰ. 学校経営の重点		
(1) 目 標		
○ 本校のこれまでの伝統を受け継ぎながら、新しい時代のニーズに合った学校運営を行う。		
○ 児童・保護者との信頼関係を築くために、教職員の情報共有や意思疎通を組織的に行う。		
○ 私立学校の教職員としての誇りと使命を自覚し、建学の精神に基づく人間育成をめざす。		
評 価 項 目	取 り 組 む 内 容 （ 指 針 ）	達成状況
①学校運営	伝統を大切にしつつ、安全で安心して学べる場になるよう、児童と児童、児童と教員がよりよい信頼関係を築く。また、保護者とも必要に応じて連絡を密にとり、児童同様によりよい信頼関係作りをめざす。	B
②組織対応	初期対応を迅速に行うためにデジタルを活用し、学年主任や学年主事、必要に応じて管理職に「報告・連絡」を行い、情報共有を行う。必要に応じて上席と対応策を「相談」して意思疎通を行い学校としての組織的対応をする。	A
③教員の意識改革	担当授業や校務分掌の分担など、自分の役割を私学教員としての自覚を持って果たす。	A

【教育研究部】		
2. 学習指導・研修の重点		
(1) 目 標		
① 私立学校としての教育の質と付加価値を意識した実践の推進のために、教師自らがプルフェッショナルとして学び続ける姿勢を率先垂範する。 ② 高い学力を保証するために日々授業改善に努め、研究テーマに沿って主体的に学ぶ学習者を育てる授業づくりを試行錯誤する。 ③ デジタル化の推進と共に保護者への理解を進める取り組みを行い、日々の指導を通して子供に高いデジタルシティズンシップを身につけさせる。		
評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
①研修	教員一人一人が得意分野や専門性を取得するために、進んで研修やセミナー、他校の学校見学などに参加して情報を取得し、視野を広げる。また、学んだことを校内で共有する。	A
②授業改善	研究テーマに沿って、子供の主体性を高めるための授業改善を進める。エビデンスを集め、改善を繰り返し、授業力を高める。	A
③デジタル化	デジタル化の推進とともに、保護者への発信・説明を積極的に行う。	B
【児童指導部】		
3. 生活指導・児童活動・保健衛生・環境整備の重点		
(1) 目 標		
○規範意識を育成し、高めていくために一貫性のある生活指導を行う。 ○子どもたち自ら諸問題を解決しようとする力と態度を育てる。また、異年齢交流を通して思いやりと協力の精神を養い、豊かな人間関係を築こうとする態度を育てる。 ○子どもたちの心身の健康を中心に、安心・安全な学校生活を実現するため活動を計画・実施する。		
評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
①生活指導と安全	挨拶、身だしなみ、登下校マナーの徹底指導を図るとともに、児童の規範意識を育てる。加えて、落雷・熱中症・不審者対応等のリスクに備えた指導や訓練を計画的に実施し、安全意識を高める。	B
②児童活動	異年齢交流を取り入れた活動（フロア活動、クラブ、委員会など）を工夫し、集団の一員としての自覚や思いやり、協力の姿勢を育てる。	B

③保健衛生と体育	健康観察の徹底とともに、感染症予防や体調管理指導（初熱順応・水分補給）を日常に行う。また気象条件に応じた運動の工夫を行い、事故や熱中症を防ぐ安全教育を推進する。	A
【進路指導部】		
4. 進路指導・学習評価の重点		
(1) 目 標		
○ 附属中学校・高等学校の6年間で十分についていける学力を身につけさせる。		
○ 個々の学力推移を的確に把握し、子どもひとりひとりの学力を伸ばしていけるようにする。		
○ 各学年において具体的な実践を通して、キャリア教育を進めていく。		
評 価 項 目	取 り 組 む 内 容 （ 指 針 ）	達成状況
①進路指導 (基礎学力)	全学年において、基礎学力を身につけさせる取り組みを個に応じて講じていくとともに、学年に応じた学習習慣を身につけさせ、進路保障につなげていく。	B
②学習評価	全学年において、学力推移表(進路指導部作成)や日々の学習記録をもとに、子どもひとりひとりの学力を伸ばしていけるようにする。また、4年生以上で基礎学力検定を年間2回実施し、基礎学力の定着をより確かなものにしていく。	B
③キャリア教育の 充実	・低学年では、自分の好きなこと、得意なこと、できることを増やし、さまざまな活動への興味・関心を高めながら意欲と自信をもって活動できるようにする。 【例】 信貴山学舎・吉野学舎・ゆうびんきょくのしごと・係活動など ・中学年では、友だちのよさを認め、協力して活動する中で、自分の持ち味や役割を自覚することができるようにする。 【例】 比叡山学舎・中京学習旅行・低学年集会のリーダー・生駒登山・係活動など ・高学年では、苦手なことや初めて経験することに失敗を恐れず取り組み、そのことが集団の中で役立つ喜びや自分への自信につながるようにする。 【例】 東京学習旅行・修学旅行・瀬戸内臨海学舎・社会見学・たてわり集会・生駒登山。将来の夢を掛け軸に表現・卒業 Movie に将来の夢を伝え合う。	A
【入試広報部】		
5 児童募集・学校情報発信の重点		
(1) 目 標		
○ 教育活動を広く公開、発信することで本校の魅力を校外に伝え、定員確保に向けた児童・園児募集を展開する。		

○ 授業や行事の実践を保護者に発信することで、児童が安心して登校できる、信頼される学校づくりを目指す。		
評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
①情報の発信、児童園児募集活動	プレススクールや説明会、各種入試イベントで、本校の魅力を参加者に伝えたり、きんちゃんしょうちゃん日記で本校の教育活動を発信したりする。見学者の来校に備え、魅力ある校内環境の整備に努める。	A
②保護者に向けた情報発信	学年通信や学級通信、教科通信、ロイロノートでの発信などを通して日々の授業や行事の様子を保護者に伝えることで、信頼される学校づくりを目指す。また、保護者の子育ての支援の一助となる取り組みを継続して進める。	B

2025 年度学校評価（最終）まとめ（AI 分析／各部長確認）

①教務部

1. 分析結果の概況：「組織対応」の評価が際立って高く、デジタルツールを活用した迅速な「報告・連絡・相談」の体制が現場に浸透していることが数値に表れています。一方で、「学校運営」が最も低くなっていますが、これは後述する「保護者との信頼関係構築の難しさ」や「伝統の継承」に対する現場の苦悩が反映された結果と言えます。

2. 自由記述から見る成果と課題

【成果と言える部分】

- ・ 組織的な初期対応の確立： 学年主任や管理職への迅速な報告・連絡・相談が徹底されており、「個人ではなく組織で対応する」という意識が極めて高いレベルで共有されています。
- ・ デジタル活用の進展： Slack やロイロノートなどのデジタルツールを介した情報共有が円滑に行われており、事案の把握が早まっています。
- ・ 教員の主体的な授業・校務への取り組み： 私学教員としての自覚を持ち、教科のブラッシュアップや校務分掌、研修担当としての役割を全うしようとする姿勢が多く教員に見られます。
- ・ 児童との関係構築： 多くのクラスで QU テストの高評価や学級満足度の維持が見られ、教員と児童の間には一定の信頼関係が築かれています。

【課題と言える部分】

- ・ 一部の保護者との価値観の乖離： 学校の教育方針や伝統が伝わりにくい一部の家庭に対し、信頼関係の構築の難しさを感じているという報告があります。
- ・ 重大事案への対応と基準について： いじめ案件など重大なトラブルがあった時、それに対する「出席停止」や「訓戒」などの判断基準を明示する必要性が指摘されています。

- ・「私学らしさ」への懸念：伝統的な行事や教育内容の見直しを進めるにあたり、「建学の精神」の再確認や再構築が必要であるとの指摘があります。

②教育研究部

1.分析結果の概況：「研修」と「授業改善」が同水準で高く、教師自身の研鑽と授業の質向上に対する意識が非常に強いことが伺えます。一方で、「デジタル化」の評価が最も低くなっています。これは、ICT活用が進む一方で、保護者への理解浸透や、デジタル化そのものの是非（学力低下への懸念）に対する現場の迷いが反映されているためと推測されます。

2. 自由記述から見る成果と課題

【成果と言える部分】

- ・専門性の向上と外部評価：ALCの取得や外部セミナーへの積極的な参加が見られ、そこで得た知見を授業に還元できています。読書感想文での全国規模の受賞など、具体的な成果も出ています。
- ・「近小型」授業スタイルの試行：自由進捗学習や、児童の「振り返り」を重視した授業改善が進んでおり、児童の主体的な学びや自己表現力が向上しているという実感が報告されています。
- ・ICT活用の日常化：生成AIの活用による業務効率化や、iPadを「学びのツール」として定着させる取り組みが継続されています。
- ・校内共有の仕組み：ロイロノートの資料箱などを活用し、優れたワークシートや実践例を教員間で共有する体制が整いつつあります。

【課題と言える部分】

- ・基礎学力低下への懸念：授業改善を行っていく上で、低学年での「読み・書き・そろばん」的な基礎学習の徹底や、高学年での演習の必要性について言及した意見があります。
- ・デジタル化への二極化：デジタル推進の一方で、保護者からは児童の集中力低下や筆圧の低下、iPadへの依存を心配する声があります。

③児童指導部

1.分析結果の概況：「保健衛生と体育」に対する評価が最も高く、特に熱中症対策や健康観察の徹底について多くの教員が成果を実感しています。一方で、「生活指導」については、継続的な指導にもかかわらず児童の意識定着に課題を感じている層が多く、平均値が最も低くなっています。

2. 自由記述から見る成果と課題

【成果と言える部分】

- ・安全・衛生意識の向上：熱中症予防に関する意識は極めて高く、気象条件に応じた臨機応変な対応（運動会の調整など）が定着しています。また、アルコール除菌や換気などの日常的な衛生管理も徹底されています。

- ・異年齢交流による成長：フロア活動やクラブ、耐寒生駒登山などの行事を通して、高学年が下級生を思いやるリーダーとしての自覚や自己有用感を育む機会が有効に機能しています。
- ・迅速なリスク対応：落雷、不審者対応、突発的な電車の遅延などに対して、計画的な訓練や臨機応変な対応が実行できています。

【課題と言える部分】

- ・規範意識の定着不足：挨拶、身だしなみ、特に登下校時の公共マナーについて、継続的な指導を行っているものの、改善が見られない児童や苦情が見られる現状があります。
- ・保護者との意識差：規範意識や体調管理、マナー教育において、学校と家庭の連携が難しいケースが増えつつあり、保護者の意識をどのように喚起するかが大きな課題となっています。

④進路指導部

1. 分析結果の概況：「キャリア教育の充実」が4.00と非常に高い評価を得ており、学舎活動や行事を通じた児童の成長に強い手応えを感じている教員が多いことがわかります。一方で、「進路保障」や「学習評価」は3.5～3.6台に留まっており、後述する学力差の拡大や学習習慣の定着に対する危機感が数値に反映されています。

2. 自由記述から見る成果と課題

【成果と言える部分】

- ・キャリア教育の体系的な実践：低学年の「ゆうびんきょくのしごと」から高学年の「臨海学舎」や「卒業Movie」に至るまで、各発達段階に応じた役割意識や自己有用感を育むプログラムが有効に機能しています。
- ・データに基づいた客観的把握：進路指導部が作成する「学力推移表」や「実力診断テスト」により、児童の実態を客観的に捉え、保護者への説明材料として活用できています。
- ・個別フォローの体制：休み時間や放課後を利用した補充学習、自作アプリやICTツール（Kahoot等）を活用した基礎固めなど、学力に不安のある児童への個別支援が積極的に行われています。
- ・外部テストでの成果：一部の学年では全国平均を上回る結果を出しており、これまでの教材選定や指導の方向性が間違っていないことを示すエビデンスも得られています。

【課題と言える部分】

- ・学力格差の深刻化：上位層と下位層の差が非常に顕著になっており、「個別最適な学び」の在り方について、研究を進める必要がある、という声があります。
- ・学習習慣の欠如と受動的な姿勢：宿題や提出物の期日を守れない、テストに向けた自発的な学習ができないといった「根本的な学習習慣」の未定着が、複数の教員から深刻な課題として挙げられています。
- ・家庭環境による格差：保護者の教育意識や家庭での協力体制に大きな差があり、学校の指導だけでは改善できない領域が増えている現状があります。

⑤入試広報部

1. 分析結果の概況：全体として3.7～3.8と比較的高い水準にありますが、前回の「児童指導部」と比較すると、項目間の点数差が小さく、組織全体で一定の熱量を持って広報活動に取り組んでいる様子が伺えます。一方で、募集活動の「結果（数値）」に対する危機感から、自己評価を厳しくしている教員も見受けられます。

2. 自由記述から見る成果と課題

【成果と言える部分】

- ・ 多角的な情報発信の定着：「きんちゃんしょうちゃん日記」の輪番制、Instagram、YouTube ライブ、SNS の活用など、デジタルを駆使した発信が組織的に運用されています。
- ・ イベントの質の向上：プレスクールや説明会、見学者対応において、本校の魅力を体験的に伝える工夫がなされており、参加者からの質問への的確な対応や、音楽・体育など教科の特性を活かしたアピールができています。
- ・ 保護者との信頼関係の深化：ロイロノートや連絡帳を通じた日々のきめ細かな発信（写真や動画の活用）は、多くの保護者から好評を得ており、安心感や信頼感の向上に直結しています。
- ・ 教員間の協力体制：ブログ発信の輪番制が負担軽減と継続性を両立させているほか、掲示物の整備など環境面での工夫も進んでいます。

【課題と言える部分】

- ・ 志願者・児童数の減少に対する危機感：募集活動に尽力しているものの、結果としての受験者数や内部進学率が目標に達していないことについて、総力を挙げて施策を講じる必要があるという声が多く上がっています。
- ・ 保護者の関心の低下と二極化：高学年になるほど保護者が発信を確認しなくなる傾向があり、「発信が信頼構築に結びつかない」現状への無力感が示されています。
- ・ 広報の質の再定義：「発信すること自体」が目的化しており、それが本当に児童募集に直結しているのか、どのような層をターゲットにすべきか、組織としての明確な方向性と分析を求める声が上がっています。

2. 保護者アンケートへの回答

●学校の教育方針について

今回のアンケートでは、多くの保護者の皆様から「私学としての特色ある教育」や「環境整備」について温かいご評価をいただきました。昨年までは学年末に一度しか行わなかった学校アンケートを学期ごとに行うことで、保護者の皆様のお感じになっている不安をできるだけ早く把握し、学級経営・教科指導の面で改善に努めてまいりました。しかしながら、学校からのさらなる情報発信を求める声が増えている、とも感じています。特に今年度は、学習習慣や基礎学力の定着についてのご意見を複数いただいております。指導のあり方について、全体に、あるいは個別に説明する機会が不足していたものと考えております。こうした保護者の皆様からのご指摘を真摯に受け止め、子供達が前向きに学習に取り組める環境を整え、情報発信の充実を図ってまいります。

●日常の ICT 活用について

iPad の活用について、写真や動画を活用したデジタル連絡帳が学校での学びの様子を可視化し、親子の対話を深めるきっかけになっているというご意見もある一方で、ICT の活用に関して厳しいご意見やご不安をお持ちの保護者の方もいらっしゃいます。こうした声を真摯に受け止め、本校の考え方と今後の方針についてお伝えしたいと思います。

1. 国の教育方針と本校の取り組みの方向性

現在、国が進める「GIGA スクール構想」および現行の学習指導要領において、情報活用能力は言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」として明確に位置づけられています。さらに現在進められている次期学習指導要領の改訂議論では、ICT を「デジタル学習基盤」として捉え、読み・書き・計算と並ぶ現代の基礎リテラシーとして確立しようとする方向性が示されています。本校の取り組みは、こうした国の目指す教育の姿と軌を一にするものです。

こうした背景のもと、本校においても iPad は特別なツールではなく、現代を生きる子どもたちにとって「鉛筆やノートと同じ日常の文房具」として活用しています。

2. 本校 ICT 活用のビジョン「Communication & Creation」

本校が掲げる ICT 活用のビジョンは、「Communication & Creation（創造・表現・交流）」です。iPad を単なる情報検索の道具としてではなく、子どもたちが自らの考えを創造的に表現し、他者と豊かに交流するための道具として位置づけています。

デジタルには、デジタルだからこそできることがあります。写真や動画で記録し表現する、遠くの人とリアルタイムに交流する、試行錯誤を繰り返しながら作品を仕上げる——こうした活動は、子どもたちの学びの幅を大きく広げます。一方、自らの手でノートに書き、図を描き、考えを整理する行為は、思考を深め、知識を自分のものにするうえで欠かせないプロセスです。

「デジタルでしかできないこと」と「アナログだからこそできること」を意図的に組み合わせ、それぞれの強みを最大限に引き出すハイブリッドな学びを日常的に実践しています。

3. 皆様のご意見を受けた今後の指導方針

「手書きの機会が減っている」「家庭でのサポートに迷いがある」「使用習慣への影響が心配」といったご意見は、ICT が日常となったからこそ、学校と家庭が共に考えていくべき大切なテーマです。皆様からの貴重なご視点を踏まえ、以下の通り取り組みを進めてまいります。

① デジタルとアナログを融合した「個別最適な学び」の実現

iPad は子どもたちの表現と交流の可能性を広げます。同時に、自らの手で書く行為は思考を深め、自分だけの表現を磨く大切なプロセスです。本校はこれらを二者択一で捉えません。お子様一人ひとりの特性・理解度・学習スタイルに応じ、デジタルとアナログを最適に組み合わせた学びを追求してまいります。

② 「学びの姿」の可視化と家庭との連携強化

「家庭でのサポートに迷いがある」というお声に対し、今後は保護者会等の場で、アプリの具体的な活用法や学校での指導事例を直接ご紹介する機会を設けます。学校がどのような意図でツールを活用し、子どもたちがどのように成長しているかを可視化することで、ご家庭が安心してお子様を見守っていただける環境を整えます。

③ 自立した学習者を育て「日常の規律」の徹底

ICTが日常の道具だからこそ、不適切な使用や生活習慣への影響を防ぐことが重要です。子どもたちが自分自身でツールを適切にコントロールできる「自立した学習者」になれるよう、情報モラル教育と個別の指導をこれまで以上に丁寧に行ってまいります。

具体的にはiPadを「自分を高めるために、必要な時に使うもの」として位置づけ、適切に使用できているか、児童にくりかえし考える機会をもたせるとともに、教員からの指導を強化してまいります。不適切な使用をしていることが複数回見られる場合には使用を禁じ、iPadを保護者の方に取りに来ていただきます。次年度は、iPadの使用について、子どもたち自身の意識を高めていく取り組みを学校全体で行ってまいります。

私たちは、保護者の皆様が大切にされている「お子様の健やかな成長」という願いを、学校も全く同じ思いで共有しております。確かな学力と豊かな創造力を育てる教育と、時代を問わず大切にすべき学びの作法を融合させ、「一人ひとりに寄り添う誠実な教育」をこれからも実践してまいります。引き続きご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

●授業の進め方について

一部ご意見に「子ども同士で教え合うだけで、先生が教えてくれない」というご指摘がありました。基礎学力の定着や指導体制へのご不安の声を複数いただいています。

本校が目指すのは、自ら課題を見つけ、自分に合った方法・ペースで解決できる「主体的な学習者の育成」です。これは、これからの時代を生き抜くための「個別最適な学び」の基盤となります。一方で、主体性を育てる過程を「放置」と感じさせてはなりません。今後は、以下の点を徹底いたします。

〈基礎基本からのスタート〉

基礎概念は教師がしっかりと説明し、全員がスタートラインに立てるよう導きます。

〈伴走者としての介入〉

つまづいている児童には教師が積極的に関わり、学校内で「わかった」という成功体験を保証します。

〈学びの可視化〉

子供が今何を学んでいるか、どういう状況なのかを見とれるよう、保護者会でロイロノートの見方を説明します。授業では上記について徹底していく中で、「成績を伸ばす」ということだけでなく、「学力を伸ばす」ことを目標としています。次項で、伸ばしたい学力とは何か、ご説明いたします。

● 本校が目指す学力について

〈発展的な課題に挑戦し、解決していく力を育てる学びへ〉

本校ではこれまで、「基礎・基本の定着」を学びの土台として大切にしてきました。確かな基礎学力は、すべての学びの出発点であると考えているからです。

一方で、これからの社会では、身につけた知識や技能を活用し、課題を自ら考え、解決していく力が求められます。

そこで本校では、基礎学力を確実に身につけることを土台としながら、その力を活用して発展的な課題に挑戦し、解決していく力を育てる学びを大切にしていきます。

子どもたちが、身につけた力を生かして主体的に考え、より高い学びへと挑戦していけるよう、教育活動の充実に努めてまいります。

● ケータリング弁当について

今年度はじめに「試食会」を開き、保護者の皆様にもケータリング弁当を体験していただきましたが、その後のフィードバックがない、というご指摘をいただきました。申し訳ございません。「温かいものが用意されていて安心した」「栄養、ボリュームもあり満足した」とのご意見を多くいただく中、味付けや見た目などで改善を望む声も寄せられました。すべて担当業者に伝え、改善を図るよう依頼をしております。業者からは、次年度も試食会を開き、管理栄養士から保護者の皆様へお話をさせていただく機会を設けてもらいたい、と聞いています。改めてご連絡いたしますので、ぜひご参加ください。

● 学校からの諸連絡の時期について

保護者会の日の時程など、詳細についての連絡を早くしてほしい、とのご意見をいただいています。次年度は、できるだけ早く通知するよう改善を図ってまいります。一方で、Cyber Campusでの連絡をご覧いただけていない保護者の皆様も一定数おられます。重要なお知らせもございますので、学校からの連絡には目を通していただきますよう、よろしくお願いいたします。

● 学級休業時のオンライン学習について

今年度、インフルエンザなどの影響で学級休業の措置をとったクラスについて、体調に問題のない児童を対象に、Zoomによるオンラインの朝の会、そして2時間程度のオンライン授業を実施しました。学習習慣を継続し、生活リズムを保つことにおいて有意義な取り組みを行うことができました。また学校での感染症の状況について、必要に応じて情報発信を行ってまいりましたが、より詳しく状況を知りたい、との声も寄せられています。今後も保護者の皆様との情報共有に努めてまいります。

●その他のご意見

その他にも多くの貴重なご意見をいただきました。中には、生活態度や授業態度に課題のある児童への対応、また私立学校に子どもを通わせる保護者としてあるべき言動について、学校として毅然とした姿勢を求めるご意見も寄せられました。本校では、児童の生活態度や学習環境を著しく乱す行為については、その都度指導を行い、改善に向けて取り組んでおります。指導を重ねても改善が見られない場合や、学校生活に重大な支障を及ぼす場合には、学校規則に基づき出席停止を含む措置を講じることもあります。また、保護者の皆様には、本校の教育方針と学校運営へのご理解のもと、子どもたちの健やかな成長を共に支えていただく存在として、学校にふさわしい節度ある言動とご協力をお願いしております。

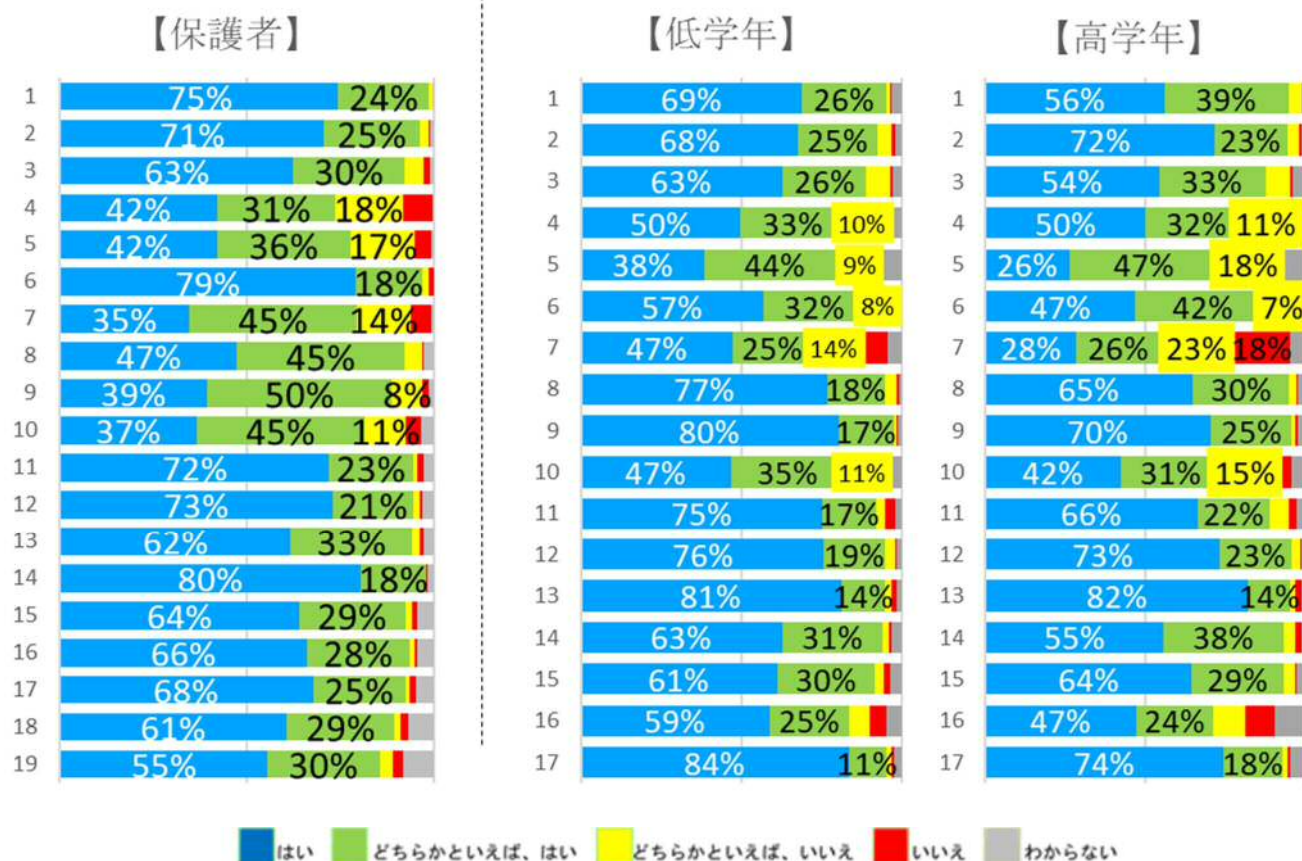
本校を信頼してお子様をお預けいただいている皆様の期待に応えられるよう、今後も安心して学べる教育環境づくりに努めてまいります。

3. 児童のふりかえりアンケートから

アンケート結果から、「学校行事に楽しく参加できている」ことや「友達と仲良くできている」ことなどは95%の児童が「はい」または「どちらかといえば、はい」を選択しているものの、一人ひとりがその楽しい学校生活を振り返ったとき、改善すべき点を自分で認識できている、ということがわかります。「ことばづかい」「時間を守ること」「登下校のルール・マナー」などは、「はい」の割合が低く、教員が日々指導している重点事項と合致しています。こういった点は、特に来年度集中的に指導を行っていくべきところと認識しています。子供たち自身が主体的に改善に取り組めるような機会をつくと同時に、保護者の皆様のご協力を得ながら、学校と家庭が同じ方向を向いて子供たちを育てていけるような実践を行ってまいりたいと考えています。また、「自分からすすんで学習している」の項目の「はい」の割合が低く、「やらされる学習」になっている児童の割合が高いことも見えてきました。学習は本来楽しいものです。考えを交流する機会を増やしたり、グループで新しい考えを生み出したり、またできることを増やすことで自信をつけたり、様々な学習方法で、子どもたちが個別に最適な学び方ができるよう、工夫した指導を行ってまいります。

現在1年生から5年生までの保護者の皆様には4月8日から始まる新しい年度の早い段階で、学校が次年度どういったところを重点的に指導するか、具体的にお伝えする機会を作りたいと考えています。子どもたちを伸ばすためには、学校と家庭とが同じ方向を向く必要があります。特に、生活指導面においてはご家庭のお力添えは不可欠であると考えています。ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

4. 保護者アンケート、児童ふりかえりアンケートまとめ



- | | | |
|---|--|--|
| 1.子どもは、安全に登下校することができている。
2.子どもは、心身ともに健康に過ごすことができている。
3.子どもは、毎日登校するのを楽しみにしている。
4.子どもは、学校での出来事(主に授業や学習のこと)を自分からすすんでよく話す。
5. 子どもは、学校での出来事(主に友達とのこと)を自分からすすんでよく話す。
6.子どもは、学校行事に参加するのを楽しみにしている。
7.子どもは、学校での学習や家庭での課題にすすんで取り組んでいる。
8.子どもは、社会でのルールやマナーについて、よく考え、正しい行動を実践している。
9.子どもは、家庭での生活習慣が身についている。
10.子どもは、基礎学力や学習習慣を身につけることができている。 | 11.学校は、私学として特色ある教育活動を実践している。
12.学校は、安全や衛生に留意して、日々の教育活動を行っている。
13.学校は、必要な情報や日々の教育活動をわかりやすく発信している。
14.学校は、環境美化に努め、施設や設備など、学習環境を整えている。
15.学校は、安全指導・生活指導に力を入れている。
16.学校は、子どものことについての相談に適切に対応している。
17.学校は、熱意をもって子どもの教育にあたっている。
18.学校は、子どもをよく理解し、性格や特性に配慮しながら指導しようと努めている。
19.学校は、子どもが主体的に学習に取り組めるような授業を実践している。 | 1.いつもあかるいあいさつをこころがけている。
2.みだしなみに気をつけている。
3.登下校のルールやマナーをまもって通学している。
4.身のまわりの整理整頓をしている。
5.ていねいな言葉づかいをこころがけている。
6.時間をまもって行動している。
7.家では、すすんでお手つだいをしている。
8.係の仕事などをきちんとできている。
9.自分のものや、学校のを大切にしている。
10.家や学校で自分からすすんで学習している。
11.学校にたのしく登校できている。
12.学校のともだちとなかよくすることができている。
13.学校行事にたのしく参加している。
14.学校の授業の内容がよくわかる。
15.まわりの人に、感謝のきもちや思いやりをもって接することができる。
16.こまったときに相談できる先生がいる。
17.今年一年でできるようになったことがある。 |
|---|--|--|

5. 学校評価委員会から

- ・附属中学高等学校教頭、附属小学校保教会同窓会会長、附属幼稚園保教会会長、校長、小学校教頭、幼稚園教頭が参加。
- ・学校と保護者が同じ方向を向いて子供たちを育てる環境づくりをすることが、保護者や子供たちが満足して通える小学校となることを確認。
- ・デジタルとアナログのそれぞれの良さを融合させていくこと、内部進学や大学の設備の活用など、附属の強みを生かした教育活動を行っていくべき。
- ・児童募集については、附属中高も含め、小学校・幼稚園共に、今後苦境に立たされる可能性は大きい。しかし、実際に通う子供たちの姿を見てもらうことや、児童生徒とふれあってもらうことで、学校の良さを伝えられるはず。まず目の前の子供たちを大切にすることが大切である。